

## 神々の理想郷 飛驒の国 (前編)

古代道先案内人 昴 崇

日本神話と密接かつ特異的な結び付きを持つ飛驒地方に存在する  
聖石群に共通する特徴とそこに秘められた謎を解き明かす旅路

かれこれ岐阜県飛驒地方にはこれまで二十回ほど訪れている。

江戸時代そのままの古い街並みや祭り、屋台の精密な彫刻など、飛驒の国からただよう気品ある香りには、心を魅了されてきた。

しかし、古代における飛驒の国といったなら、多くの人々は、何も無かったという印象しか持っていないのが現実だろう。

今、自分が古代の飛驒の国について、関心を持ってしまった理由を考えると、それはおそらく二十歳頃、友人連中と訪れた初めての飛驒旅行での光景が、そのきっかけを作ったのだと思う。

その旅行での光景とは、奥飛驒の観光鍾乳洞の駐車場に立てられていた、何本もの奇妙な旗である。

そしてその旗には、どんな神か仏の名前かは知らないけれど、こんな言葉が書き連ねてあったのだ。

両面宿儺大菩薩

### 縄文期飛驒の特異な巨石文化

日本列島における巨石文化の始まりは、おそらく今から五千年以上前、縄文時代前期と呼ばれる時代のことだと思ふ。

そして、それが始まった場所は、信濃の国、今の長野県の諏訪地方や安曇野地方であるらしい。

諏訪郡原村の阿久遺跡における、直径百二十メートルのドーナツ状集石や、大町市上原遺跡における

大小二つの小規模な環状列石は、死んだ人の魂を山へと送るための施設でもあろうし、北極星を中心とした星座の運行を、地上で表現したものであるのだと思ふ。

飛驒古川 太江 御番屋敷遺跡

さて、飛驒地方において、巨石文化が始まった年代について考えるなら、それはおそらく今から四千年以上前の、縄文時代中期のことだと思われる。

吉城郡古川町太江の台地で見つかった御番屋敷遺跡は、そんな飛驒の巨石文化の始まりを告げる遺



写真：御番屋敷遺跡

跡である。

御番屋敷遺跡の巨石は、高さ一メートルくらいの柱状の石と、高さ五十センチくらいの柱状の石とが並んで立つ、大小二本一組の立石遺構で、大きい立石の根元には、茶碗を半分に割ったような形の石が、それに寄り添うようにして置かれている。

こんな説明をすると、環状列石等の縄文文化に親しんできた人々には、とても奇妙な印象が感じられるかもしれないけれど、実は、この二本一組と言う構造こそが、飛騨地方の巨石文化における大きな特質なのである。

また、この二本一組と言う構造は、飛騨の遺跡それぞれによっても微妙に異なっていて、御番屋敷遺跡の場合は、おそらく、生命が生まれた瞬間表現しているのだと思う。

今、この遺跡の立石は、工場のような建物の裏に移設されて、農道の脇にひっそりと立っている。

なお、この遺跡の近くには、飛騨の中でも最も古い神話伝承を伝える、高田神社という古社があり、「古事記」国ゆずりの章における、出雲の国に遣わされたキジの鳴女を祭神としている。

なんと、この太江地区では、今でもキジの捕獲、射殺を禁じる習慣があるのだという。

#### 飛騨高山 上野平 垣内遺跡



写真：垣内遺跡

縄文時代も中期の後半に入ると、飛騨地方は信濃との本格的な異文化交流の時代を迎えるらしい。

高山市街を丹生川村方面へ行く途中、そこには上野平と呼ばれる広い高原地帯がある。

垣内遺跡とは、上野平の松森神

社という社を、乗鞍岳が見える方へ少しばかり歩いたところの、田んぼや畑一帯から見つかった遺跡である。

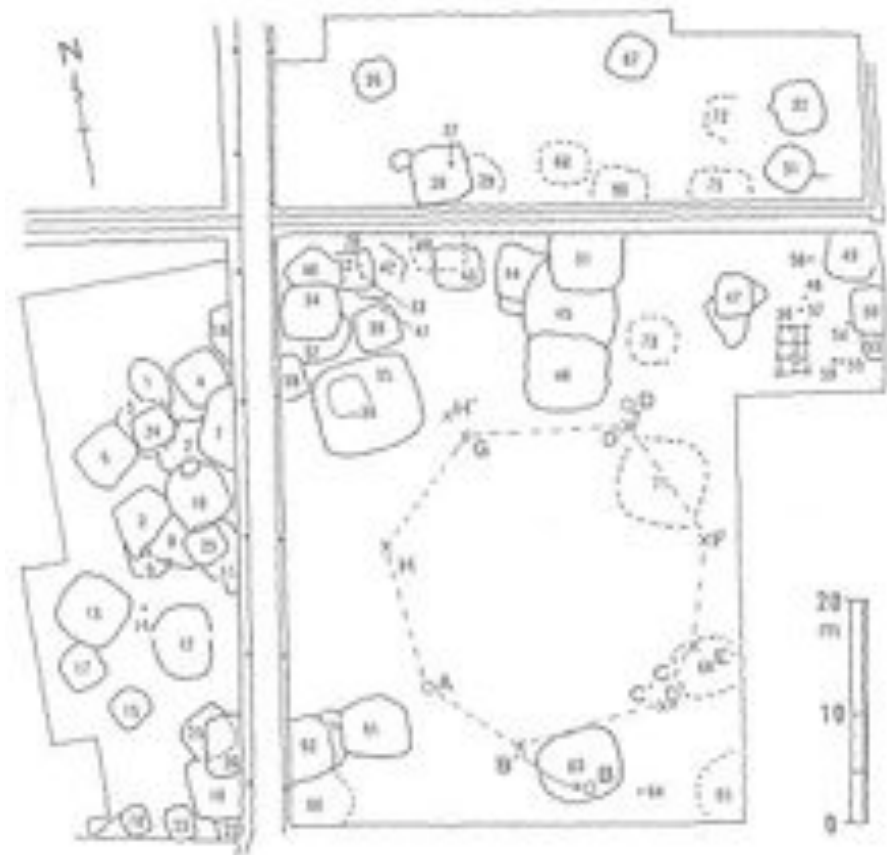
垣内遺跡は今、田んぼの中に扇形をした一つの巨石があるだけだが、かつてこの場所にはいくつもの巨石を配置した環状列石が存在していたとされる。

田んぼの手前には石碑があり、それによると、垣内遺跡からは環状列石を中心にした環状の住居跡群と、多量の信州系土器が見つかったという。

住居跡群の年代については、縄文中期後半が四十八基、後期前半が二十基と説明してあるので、環状列石が造られたのは、その二つの年代のどちらかなのだと思う。

ところで、垣内遺跡の環状列石は、どんな構造をしていて、今それらの石はどこに行ってしまったのか。

それを確かめるべく、高山市郷土館を訪れると、おおよそ以下のような事がわかってきた。



図：垣内遺跡俯瞰図

まず、垣内遺跡の環状列石は、A地点からH地点までの八ヶ所の地点に、大きさも形も異なる様々な石があつて、それらの石は直径約三十メートルの正円形を形作っていた。

また、環状列石の内側には、土壙墓、つまり地面に穴を掘った墓が多く見つかった。

そして、今田んぼの中にある扇型の巨石は、A地点の石のことであり、田んぼの脇に移動させてあるBとC地点の二つの石と合わせて遺跡の名称でもある「三ツ岩」と呼んでいるのだという。

その他の地点の石については、みんなこの付近に存在しており、松森神社の石碑や墓地の中の石、民家の庭石、温泉の記念石碑の台座石などがその石であるという。

それから、遺跡東隣の梶井家の庭には、扇型や円柱形や小さ目の丸い石があるが、これら三つの石は、かつて環状列石のどこかの部分に配置されていたらしい。

環状列石を構成していた石は、合計すると十二個であつた。

なお、そのうちE地点の石については、松森神社に立っている高さ二百三十センチ位の大きな石碑と、その下に横たわる長さ百六十センチくらいの石がそれだというが、ここだけは石の数が二つで、しかも柱状の石を大小二本一組で立てていることになりそうだ。

この環状列石の構造について考えてみると、それは大きく分けて、石一つあたりが大きいこと、そして立石遺構が多いことの二つであると思う。

まず、石の大きさについては、松森神社の石碑がもっとも大きく、次いで、梶井家庭先にある高さ百十センチくらいの台形の石（D地点にあつた石）なども、かなりの重量がありそうだ。

おそらく、松森神社の石碑は、縄文時代の巨石遺構ではもっとも重たい石であろうと思う。逆に最も小さい石となると、梶井家の庭にある丸い石が高さ五十センチくらいで、最も軽そうである。

垣内遺跡のように、巨石を少数

個使った環状列石は、日本国内ではあまり分布しておらず、むしろ構造の点では、ヨーロッパに分布する環状列石によく似ているのではないだろうか。

次に、石それぞれの形については、十二個のうち九個の石が、円柱形、角柱形、扇形など、立てることを目的にしたかのような形をしているので、このような点は立石文化の本場ならではの個性だといってもよさそうだ。

そうなると、この巨石遺構は環状立石と呼んでもよさそうなのだ。が、個人的には、これは飛騨と信濃の二つの巨石文化が、この土地で見事に調和した結果なのだと思う。

信濃は環状列石文化の生まれた土地でもあり、垣内遺跡から多量の信州系土器が出土したことも考えると、おそらく、ここでは飛騨と信濃の人々が仲良く共生している、お互いの墓制や祭制まで中和させてしまったのではないだろうか。

そして環状立石の内部空間には、

人間はおろか、神の使いとしての鹿や熊までもが葬られて、二つの部族にとつての共通の母なる山、乗鞍岳への、魂送りの儀式「イオマンテ」を行っていたのだろう。

縄文時代の飛騨において、この後、これ以上の大きな拠点集落は作られなかったようである。

なお、垣内遺跡から乗鞍岳に向かって、左手前に連なる山並みの中に、飛騨で最も古い寺院といわれている千光寺がある。

地元の丹生村では、その千光寺を開創した人のことを、両面様、あるいは、スクナ様と呼ぶことがある。

### 飛騨の造形石器

今から約四千年前、縄文時代後期に入ると、飛騨地方では気候の寒冷化からか、村や人々の数が少なくなっていくようである。

しかし、それと時を同じくして、この地方では、石冠、独鈷石、御物石などと呼ばれる不思議な形の

石器が多く作られるようになる。それらの石器を見るのなら、まずは高山市街の一角にある、高山市郷土館を訪れてみると良いだろう。

郷土館に入っていくと、考古資料展示室の手前には、人面石、と名づけられた大きな石が置いてある。

この人面石はどうやら上野平らで見つかったものであるらしい。

その石の表面には、目を表現したような丸いくぼみが二つ、口と眉を表現したような横に長い切込みが二つ、くつきりと刻んである。

このような石は、吉城郡国府町の郷土資料館でも見たことがあるけれど、おそらく飛騨の縄文時代においては、村の内外において魔よけとして使ったのであろう。

展示室に入ると、そこには珍しい形をした石の造形品がいくつも並んでいて、他の土地の博物館では感じる事の出来ない、奇妙な感覚を味わう事が出来る。

縄文期の飛騨における最大の特

色とは、これらの品々を見てもわかるように、石を丁寧に加工した造形品にこそあると言えそうだ。

なお、石冠、独鈷石、御物石などの石器については、飛騨の最北部、宮川村の資料館でも、充実した出土品を見ることが出来る。

石冠は、主に東日本を中心に見つかっており、出土数の五割強、約三百五十点が飛騨に集中している、最近では墓壙から発見される例が増加しているという。(「飛騨よみがえる山国の歴史」森浩一・八賀晋 編 大巧社 一九九七年)

石冠は、その種類も様々で、球頭状、斧状、山形、石鋸型、古いネズミ型、カツオ節型など、七種類以上の形が存在しているらしい。

飛騨以外で石冠が多数出土した遺跡としては、新潟県中頸城郡中郷村の箆峰遺跡が知られており、ここでは六十八点の石冠が出土したという。(「飛騨のあけぼの」岐阜県博物館発行 一九九二年)

もしかしたら、飛騨の人々は山



写真：造形石器（高山市郷土館展）

を越えて越後まで移住し、その土地の石材を使って、先祖から続く副葬品を作ったのだろうか、いろんな空想をめぐらしてしまう。ちなみに、石冠という名称については、これを名づけた人の憶測によるものらしく、この石器を頭に取り付けて使用した可能性は、残念ながらほとんど無いようである。

独鈷石は、主に東日本から見つかっていて、約六百点の出土のうち、飛騨からは六十六点が出土したという。「飛騨のあけぼの」

そうになると、総数の一割以上が飛騨での出土ということになるが、飛騨のような土地に割以上というのは、多い数値だと思う。

独鈷石とは、その名のとおり、仏具の独鈷に形が良く似ているために、そんな名前がつけられた。

御物石は、全国で百四十四点が見つかつたうち、飛騨では七十四点が出土したという。「飛騨 よみがえる山国の歴史」

この石器は、石冠や独鈷石よりひときわは大きく、長さが二十センチから四十センチもあり、中央がやや細くなっているために、枕石とも呼ばれる。

御物石と言う名称がついた理由については、明治時代、優秀な品が能登半島穴水町から出土し、それを皇室に献上したことが、その名の由来となっているという。

僕は東京上野の国立博物館で、その名称の由来となった御物石を見た記憶がある。

また、高山市郷土館の説明書きによると、この石器は縄文時代晩

期前半に集中して作られ、東は新潟県、西は岡山県と鳥取県から出土しているというから、石冠や独鈷石よりも分布地域が西に大きく移動していることになりそうである。

石冠と独鈷石が作られた時代と、御物石が作られた時代とは、日本列島に気候の変化でも起こっていて、飛騨の人々は西へと移動を始めたのだろうか、またしても空想をめぐらせてしまう。

御物石が出土した遺跡の中で、個人的に一番印象に残っているのは、奈良橿原神宮の近くで見つかった橿原遺跡である。

その遺跡で見つかった御物石を、僕は橿原市の博物館で見た覚えがあるけれど、明日香地方において、飛騨の祭りの石器が使われていた事には、少しばかり驚きを感じたものだった。

また、京都の国立博物館では、飛騨小坂と奈良市で見つかったという、御物石の秀品を見たこともある。

高山市街には、もう一つ楽しい考古資料館がある。

旧い町並みで有名な上三之町には、飛騨民俗考古館という、個人経営の施設がある。

この通りを歩いた人なら、忍者の衣装と武器がショーケースに展示してある屋敷と言え、おおよそ思い出すことが出来るかもしれない。

そのショーケースの脇には店の看板が出しており、そこには奇妙な言葉が幾つか並んでいる。

幻のつちのこ形石器、ヒスイ製指輪、日月人面釣手土器。

これらは展示品の名称のことである。

屋敷の中に入っていくと、先ずそこには土間があつて、猿石だの石人だのと名づけられた奇妙な石が、床にいくつも置いてある。

これらの石は、それぞれの年代は定かでないものの、上野平の人面石と同じように、魔よけとしての意味があるのだと思う。

さて、土間に置かれている石の中に、一つ気になる物があった。

その石は、長さ百四十センチくらい、厚さ十センチくらいの、板状といってもよさそうな長い石で、その中央付近には、皿のような浅いくぼみがあった。



写真：飛騨民俗考古館にて

そして、もう一つ気になったのは、中庭に立っていた一本の柱状の石である。

その石は高さが七十センチくらいで、土間にある長い石のことを考えると、大小二本一組と言う、飛騨の巨石文化の特質が思い浮かんだ。

早速、この二本の石について、

館主の坂本さんに質問してみると、おおよそこんな答えが返ってきた。



写真：立石（飛騨民俗考古館にて）

一昔前の発掘調査は、今よりもかなり不正確に行っていたので、出土品が発掘現場に残されたまま、調査を終えてしまう事が多かった。そのため坂本さんの父親は、それらの放置された出土品を回収して、このように個人経営の考古資料館を作ることにした。

そして、この二本の石については、高山市の西隣、清見村の牧ヶ洞において見つかったものであり、その遺跡の年代は縄文時代中期から後期であると言う。

その後、図書館で「清見村史」を読んでみると、確かに牧ヶ洞では、縄文中期から後期にかけての上岩野遺跡という遺跡を発掘調査していることがわかった。坂本さんによると、この二本の石は同じ地点から見つかったというので、これらは縄文中期か後期のどちらかの年代に、おそろく並べて立てられたのだと思う。

なお、飛騨民俗考古館に展示されていたものの中で、個人的に一番面白いと思ったのは、大サンシヨウウオの形をした石器である。その石器は、岐阜県内でも奥美濃地方の、郡上郡和良村で見つかったというので、飛騨の出土品ではないことになるけれど、こんな珍妙なものを作った古代人が存在したことは、とても素晴らしいことだと思った。

### 飛騨国府 漆垣内 立石遺跡

今からおおよそ三千年前、縄文時

代の晩期になっても、飛騨の巨石文化はなおも途絶えることがない。益田郡萩原町四美の、森山神社の付近では、横倉遺跡という縄文晩期の遺跡の発掘にもなつて、高さがそれぞれ一メートルくらいの立石が二本見つかった。

今でも森山神社の階段の下には、横倉遺跡の立石らしきものがある。一つは長さ一メートルくらいの石が、一つは立っており、一つは転がっている。

飛騨地方では分水嶺の南側になると、遺跡の数そのものが少なくなってしまうものの、金山町の卯野原など、立石遺構が見つかった縄文遺跡はいくつか存在する。

さて、縄文時代もそろそろ終わりを告げる頃、飛騨地方では、どうやら稲作が始まっていたようである。

その稲作の証拠が見つかった遺跡とは、吉城郡国府町漆垣内の立石遺跡である。

しかも、その遺跡の名前が示す通り、ここからは立石遺構が見つ

かつており、例によってそれは二本であった。

発掘調査後、その立石二本は漆垣内の日枝神社に移設された。

二本の立石は、ともに高さが七十センチくらいで、一本は先が尖っており、もう一本は先が二つに分かれていたので、これは男と女を表現しているのではないかと感じた。



写真：飛騨国府立石遺跡

そうすると、縄文中期の御番屋敷遺跡においては、立石二本の意味は、親と子、であったものが、この遺跡ではもはや、男と女、と

いう意味に変わっていることになる。

つまり、茶碗を半分に分けたような形の石が、構造の点では消失して、縄文晩期になると、横倉遺跡の例にも見られるように、立石の大きさまでもが同じになつてしまつた訳である。

ただ、立石遺跡には、二本の立石に加えてもう一つ珍しい構造があり、それについては脇の説明板にこんな説明がある。

祭祀場跡は赤土層を石で囲つた直径二メートルの円形の空間で火を炊いた痕跡が見られ、東側には三日月形に河原石を敷き、左右にここにありますが「立石」を立てた遺構が発見されました。

この祭祀場跡については、「飛騨よみがえる山国の歴史」の中に、発掘当時の写真が載っており、つくづく個性的な遺跡だと感じた。

まず、その写真の手前には、内部で火を炊いた石囲いが写っており、その奥右側には三日月形の配石遺構、右側には太陽を表現した

かのような円形の配石遺構がある。そして、そこからさらに奥へ少し離れた場所には、右側に先が二つに分かれた立石が、左側には先が尖つた立石が並んで立っていて、その背景左寄りには国府の連山が連なっている。

このような祭りの場を考え出した人々は、まさに縄文時代の哲学者と呼んでもよいだろう。

ここでは天空のエネルギーが太陽と月によって表現され、大地と人間のエネルギーは立石によって表現され、天と地と人のエネルギーが一つになったときに、初めて稲が実ると考えたのではないだろうか。

立石遺跡の説明板には、稲作についてこのような説明がある。

祭祀場の付近は浅い川を中心に低地が形成されており、一帯からは晩期の特徴である浮戦網縄文土器が多量に出土し、プラントオパールという化学分析をした結果、稲作が行われていたことが確認され、東海地方、北陸地方では初め

ての発見で、山梨県、千葉県に次いで全国で三例目です。

この遺跡からは独鈷石も出土しているというから、豊作を祈る祭礼は、おそらくそのような造形石器を使って行われたのだと思う。

なお、二本一組の立石遺構については、その分布は飛騨北部を中心に、東美濃の恵那地方にまで見られるし、一本だけ立てた縄文遺跡なら、奥美濃地方の郡上八幡にもある。

縄文時代の日本列島を祭りの場から分類していくならば、これらの地域は、立石文化圏、とも呼んでよいと思う。

それは、東日本のストーンサークル文化圏に次ぐ、第三の文化圏である。

ちなみに、豊の国、今の大分県地方には、年代不明ながら、立石遺構や環状列石遺構が多く分布している。

中でも、宇佐郡安心院町の米神山には柱状の石を二本並べて立てた遺構が、山中にもふもとにも、

いくつか存在している。

その米神山には、地主の女神が神武天皇を迎え、石の雨を九九九本降らせたという伝説が残っている。

また同じく安心院盆地の古社、三女神社には、境内に様々な形の立石が雑然と並んでいて、この土地が立石文化の分布地であることを実感させてくれる。

三女神社の古伝承では、「日本書紀」においてアマテラスの三人の娘が降臨した宇佐嶋とは、この土地のことであるという。

三女神社の立石群と古伝承のことを考えると、宇佐地方の立石文化は、古代にこの地に移り住んだ人々によって、このような形で根付いていったような印象を受けた。

前編 完

# 報 会 学 会 クラ イ

## コラム

諏訪の建御名方神や、葛城の土蜘蛛など、記紀や風土記で悪役として退治された者達は、地元へ足を運んでみると崇敬を集める神として祀られていることが往々にしてある。飛騨の両面宿禰もその一人(?)で、記紀では恐ろしい姿と行動で描写される完全な悪役であるが、地元での知名度は抜群で人気も高い。

記紀以前の古い伝承を持つ磐座は、実はそのような地域に多い。磐座を前にして古い伝承に触れると、正史とされている歴史の一部に一抹の不整合感を覚えることがある。天孫の一族である天津神を祀る磐座は美しく、国津神を祀る磐座は畏ろしい。それでもなお、天孫の天下りや神武東征以前、この日本という国を造ったのは本来、両面宿禰や建御名方神のような、まつろわぬ者達であったのではないかという想像が膨らむ。

源義経の例を解くまでもなく、判官贖戻は我々日本人の本能に根ざす性向であるが、その由来は案外このような所にあるのかもしれない。血が覚えているのだろうか。